

## 《書評》

原田マハ著

『サロメ』

文藝春秋 2017年

緋田 亮

〈サロメ〉と聞いてまず思い出されるものは何であろうか。カラヴァッジョやモローの絵画か、シュトラウスのオペラか。名前こそ明記されないものの、様々な芸術家にとって創造の源泉となった聖書の一節を思い起こすかもしれない。あるいは、19世紀末に時代の寵児が生み出した演劇であろうか。

原田マハが『サロメ』を書きあげたその根源にあるものは、オーブリー・ビアズリーによる絵画「おまえの口に口づけしたよ、ヨカナン」である。著者による新書『いちまいの絵——生きているうちに見るべき名画』（2017年6月）では、2014年にオルセー美術館で〈彼女〉と対峙したときのことが語られている——「会場の半ば、「運命の<sup>ファム・ファタル</sup>女」のコーナーに小さな白黒の絵が展示されてあった。その一角が不思議な光を放っているようで、私は惹きつけられていった。そこではっと息をのんだ。オーブリー・ビアズリーの描いた、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の挿絵だったのである。」美術に造詣の深い著者が、「私を変えた世界を変えた」26点の絵画の一つとして上記の絵を取り上げたこの本に先立って発表した作品が、長篇『サロメ』（2017年1月）である。

物語は、現代のロンドンから始まる。未発表の〈サロメ〉を入手したジェーン・マクノイア博士は、ビアズリーを専門とするV&A客員学芸員の甲斐祐也に相談を持ちかける。ここから舞台は19世紀ロンドンへと移り、メイベル・ピアズリー、弟のオーブリー、オスカー・ワイルド、アルフレッド・

ダグラスといった人々の愛憎入り交じる、〈サロメ〉を巡る物語を読者は目の当たりにすることとなる。

本の題名、そして日本人とイギリス人という〈異国人〉のやり取りから物語が始まることから、その背景にはワイルドの『サロメ』があることは明白である。しかし、著者の主眼は、表紙に例の絵を、そして本扉の次ページには「あゝ！あたしはたうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカーン、お前の口に口づけしたよ」という台詞を載せていることが示唆するように、ワイルドよりもピアズリー（姉弟）の人生に向けられている。史実を織り交ぜながら描かれた、粋物語の体裁をとるこの『サロメ』の特徴の一つは、複数の階層で仕掛けられた〈ズレ〉にあると考えられる。

まず読者が認識するのは、物語全般で繰り返し強調されているピアズリー姉弟の〈普通〉とのズレである。彼らの母は、オーブリーの芸術的才能に触れ、「やっぱり普通じゃない」という思いをこぼす。オーブリーがグラマースクールで演劇や出し物に関わると、「普通ではない芸術的才能がある」ことに周囲は気付く。オーブリーの絵の価値を見出したフレデリック・エヴァンズは、彼の絵を「よくも悪くも普通ではない」、「普通じゃないのを超えて、異端だ」と評する。姉のメイベルは、その異端な画家の姉であること、そして舞台女優としての成功を夢見て活動していることを隠しながら、エヴァンズの書店を訪れていたが、後に彼から「あんたの立ち居振る舞いは、普通のご婦人と違っていた」と言われる。彼女自身も、一人の女性として当時の支配的な価値観とのズレに自覚的であり、「普通であれば、自分くらいの年頃の女性は、結婚して家庭に入り、子供を育てているのが当たり前だ」と家庭の天使的な役割にも思いを巡らせる。このようなピアズリー姉弟の〈普通〉からの逸脱が繰り返し示されることで、彼らの存在が物語世界で際立つこととなる。

この物語にはまた別の大きなズレが描きこまれている——オスカー・ワイルド原作の『サロメ』とのズレである。その前提として、それぞれの作品の主人公メイベルとサロメが重なり合うことを読者に気付かせる作中の表現は枚挙に遑がない。舞台女優としての成功を夢見るメイベルは、聞いたこともない演目のオーディションで、サロメを存分に意識しながら靴を脱ぎ捨て、ストッキングをするりと足から抜いて、裸足になっ

たり、咯血し意識を失ったオーブリーの「首を掻き抱い」て、口と口を合わせたりする。サロメの象徴の一つである〈月〉とメイベルが直接的に結びつけられることはないが、メイベルが舞台女優として（一時的な）成功を収めた際の描写——「スポットライトが、この世界中で自分ひとりだけを照らし出す太陽のように頭上高く輝いている」——は、太陽によって形を規定される月の性質と彼女の人生の満ち欠けを踏まえると興味深いものである。物語の主人公であるメイベルが、演劇〈サロメ〉の主人公と随所で響きあっているさまが見て取れる。

ただし、メイベルは原作のサロメ像を単純に引き写して創造されたキャラクターではない。サロメとの類似性の中に、差異を紛れ込ませることによって、一人の女性としての葛藤が巧みに表現されている。幼少期からオーブリーの絵のモデルを引き受けているメイベルは、画家である弟の視線を一身にまとう。つまり、男性の視線にさらされる対象としての立場が強調されている。それはワイルドによって書かれたサロメを想起させるものであるものの、自身の扇で顔を隠し、視線に耐えられないと嘆くサロメに対し、メイベルはその職業が象徴するように「目に飢えて」いる。欲情する目の対象となることに恍惚を感じ、そして自分には「見られる素質」があると信じる彼女は、一人の男の視線では物足りなくなっており、「百万人のオーブリーの『目』にみつめられたい」という彼女の強い願いが物語の序盤で語られる。

多数の目にさらされるためにメイベルがとる手段の一つが、処女性の喪失である。メイベルは舞台に立つという自己実現のために、劇場関係者に身をゆだねる。原作のサロメも、ヨカナーンの肉体を追い求めるという意味では似ているかもしれない。しかし、メイベルの「白い麻の寝間着の裾をゆっくりと染めていく鮮血」がこの物語の始まりを象徴するものである一方、その色彩から想起される原作『サロメ』の一場面——「お前の小さな足は白い鳩とならう。木の枝先に揺れ踊る小さな白い花ともならう・・・おゝ！ならぬ。踊れば血を踏まう！あたり一面、血のしぶきだ」——は、結末に向けてサロメが動き出す終盤のシーンである。初めから純潔を失うことによって願いを叶えようとするメイベル、純潔を武器として最後に願いを叶えようとするサロメ。大筋ではサロメ像を辿りながらも、初期段階

で二人の性質が巧妙にずらされることで、「悪魔に身体を売り渡す」という決断をした主人公メイベルの意志や迷いが浮き彫りとなっている。

言うまでもなく、メイベル／サロメだけでは小説『サロメ』は成立しない。「父親不在のピアズリー家」において、長男であるオーブリーが「着席しないことには夕食は始まらない」ことから明らかなように、物語中では彼が父性的一端を担っている。そのことは、絵のモデルを務めるメイベルに向けられる欲情した「目」の持ち主であることと相まって、オーブリー＝ヘロデという結びつきを読者に意識させる。物語が進むにつれて、その関係性に加わるのがオスカー・ワイルドである。「預言者のような口調で」話す彼を、メイベルは「女優として花開く希望を託してみたい相手」として捉え、「強い願望」を持って取り入ろうと試みる。

オーブリーとワイルドがそれぞれヘロデ、ヨカナンのように機能しつつも、その等式は固定的ではなくむしろ流動的なものである。メイベルが、自身の思う七つのヴェールの踊りを〈語って〉みせた相手はワイルドであり、彼女が繰り返し様子や体調を見に行く対象は自室に籠るオーブリーである。実際に彼らの視線はすれ違っていく。両者の〈目〉を求めていたメイベルを取り残すように、オーブリーの視線はワイルドに、ワイルドの視線はオーブリーへと注がれることとなる。この視線の行き違いは、「ふたりは普通ではない関係に陥っている」ことをメイベルに実感させ、その結果、三者の関係性を揺り動かしていく(傍点引用者)。物語終盤では、オーブリーとワイルドに加えてメイベルの役割さえも固定されることを拒む。作者が作り出した舞台上で、役者は場面に応じてその姿を変え、互いの役割を奪い合うかのような力強さで読者を「最高潮<sup>クライマックス</sup>」へと導いていく。

改めて、メイベルの行動や関心に目をやると、物語全体を通じた大きな変化に気付かされる。それは、〈声〉から〈文字〉への移行である。彼女は、自分をモデルにスケッチをする弟の「甘美に響く」「つぶやき」に胸をしめつけられたり、「一言だけ」の台詞のために劇場主と関係を持ったりする。その上演の後にどこかから「声がかかると信じて」いたメイベルであったが期待通りにはいかず、劇場主との関係を断ち切る。その後、メイベルがフレデリック・エヴァンズの書店を訪れた際に、彼から「二十世紀はどんな時代になるだろうか？」問いかけられ、「ごく普通の市民がひとり残ら

ず字を読めるようになって、新聞や雑誌を楽しむ」時代がくるという彼の予言めいた持論を聞かされる。ここで読者は、物語序盤で提示された〈声〉を象徴する場面——病床に臥すオープリーの「初めに言葉ありき」で始まる有名な聖書の文言を繰り返しつつやく——を対比的に思い出すかもしれない。そしてその時にメイベルがエヴァンズから手渡されるのがワイルドによる私家版『サロメ』である。スマイレ色の表紙の本を手にしたメイベルは、幼少期に聖書を読んだ体験を思い返し、手元の薄い本に刻まれた活字を「食べるように」読む。彼女の演劇すなわち〈声〉への憧憬は残しつつも、物語は手紙、電報、紹介状、そして英訳版『サロメ』といった〈文字〉を中心として展開していく。文字の力を利用して切り開かれたメイベルとオープリーの人生は、「大きく踊る文字」によって再度、変転を迎えることとなる。そして「口をふさぐ」という行為によって、物語の幕は下ろされる。

メイベルが物語中でサロメとしての役割を担うことにもまして、この〈声〉から〈文字〉への移行を体現していることは興味深く感じる。それは、フォノセントリズム音声中心主義を批判的に捉えているといった理由によるものではなく、著者がジャンルのずらしを試みているからである。〈声〉から〈文字〉への移行は、〈演劇〉から〈小説〉への移行とも考えることができる。物語中で〈舞台女優〉を〈書く女〉へ徐々に変容させることによって、著者は原作『サロメ』の演劇的な要素を意識しつつ小説『サロメ』へと書き換えたと言えるのではないだろうか。21世紀を舞台としたプロローグで、ワイルド研究者のジェーン・マクノイア博士はピアズリー研究に携わる甲斐祐也に次のように問いかける——「〈サロメ〉は、誰によって書かれたと思いますか？」(傍点引用者)原田マハの『サロメ』は読者に、この問いに対する新たな選択肢を与えてくれるかもしれない。